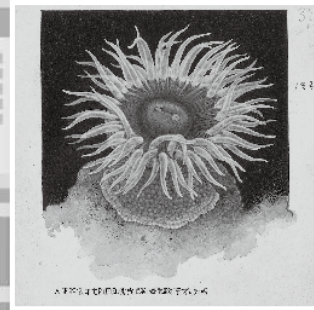


# 大学文書館へ 行こう

## 第13回 「絵心のある資料たち」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



内田亨のスケッチ (1926年)

現在、大学文書館では沿革展示室において、企画展示「絵心のある資料たち」を開催しています。北海道大学の歴史に関する資料の中でも、特に「絵心」溢れる資料を紹介する展示です。大学文書館への寄贈資料には、文書資料ばかりではなく、例えば、教員が少年時代に図工や美術の授業で描いた絵なども含まれます。農芸化学の高尾彰（一九二六～二〇〇八年）農学部教授が小学校時代に描いたクレヨン画は、ユーモア溢れる色彩が目を引く微笑ましい作品です。応用動物学の犬飼哲夫（一八九七～一九八九年）農学部教授が中学校時代に描いた水彩画は、繊細な出来映えです。大先輩を身近な存在に感じさせてくれる資料です。

### 内田亨の妖しいイソギンチャク

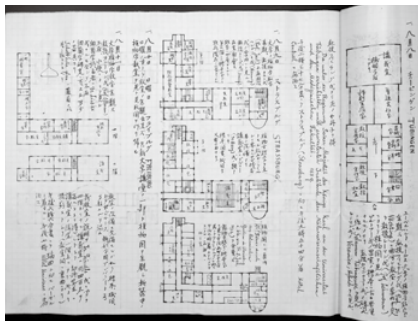
もう少し大学らしいアカデミックな絵心もあります。後に理学部教授となった動物系統分類学研究所の内田亨（一八九七～一九八二年）が描いた海洋生物のスケッチです。海中の暗闇をイメージさせる背景に、色鮮やかなイソギンチャクを浮かび上がらせています。迫真性、写実性はもちろん、妖しい夢想性さえも感じさせます。

カメラやビデオなどの撮影機器が普及する以前、大きき、色彩はもちろん、欠損や瑕疵も含めて「見たままを写生する」という記録の方法は、科学研究には欠かせない技術でした。学生は講義の中で写生の練習を行ない、教員は自身の研究発表や講義のために

に作画をしました。また、大学に「画工」と呼ばれる植物・動物・昆虫などの絵を描く専門技術者がいた時代もありました。今回の展示でも、宮部金吾（一八六〇～一九五年）・工藤祐舜（一八八七～一九三三年）といった北大の植物学研究者の下で画工を務めた須崎忠輔（一八六六～一九三三年）の植物画を出展しています。内田のスケッチや須崎の植物画は、作画の正確さや精緻さが、科学研究の質を大きく左右する要素であったことを示す資料とも言えます。

### 半澤洵の研究施設見取り図

別の観点から大学の研究活動に関連して絵心を発揮した資料に、応用菌学を研究した半澤洵（一八七九～一九七二年）の「旅行



半澤洵「旅行日記」(1913年)

日記」があります。東北帝国大学農科大学助教授であった半澤は、一九二一年、応用菌学研究のためヨーロッパ留学を命ぜられます。半澤は、一九三三年八月から約二ヶ月、ヨーロッパ七カ国四十九都市の大学・研究所の植物学・応用菌学関係の研究施設・設備を調査し、教室・実験室・標本室などの配置・間取りを精細な図にしてレポートしました。半澤の帰国後、東北帝国大学農科大学は、一九一六年に日本初の応用菌学講座を設置し、応用菌学教室を新築して、半澤を初代教授とします。新しい学問分野を興そうとする半澤の熱意がほとばしる図です。

### 堀健夫のカリカチュア

ちよつと洒落た絵心としては、堀健夫（一八九九～一九九四年）理学部教授が描いたカリカチュアがあります。堀本人はじめ研究室のスタッフ・学生たちの特徴を捉え、デフォルメして描いた作品です。天才・秀才が集った物理学講座堀健夫研究室の雰囲気を感じ



堀健夫のカリカチュア (1951年)

えています。堀は、アインシュタインの相対性理論を紹介したことも有名な量子力学研究者ですが、絵筆を取っても奇才を發揮しました。

堀は、若いころ、京都の第三高等学校で講師として湯川秀樹や朝永振郎（一九〇六～七九年）を教えていました。堀は朝永の姉と結婚したため、朝永は義弟にも当たります。今回の展示では、学生時代の朝永が堀に宛て、京都の老舗たわらやの名物「本うどん」を描き送った手紙も出展しています。後のノーベル賞受賞者が描いたうどんの絵も中々貴重です。